

## 東京財団主催 公開シンポジウム

# 「ホームズ国連事務次長と語る人道支援」

2007年6月15日開催

## ホームズ事務次長の講演要旨

私が就任して、すぐにアジアを訪問したいと思ったのは、アジアとのパートナーシップが OCHA にとって重要だと思ったからです。特に日本は人道支援における国連にとって重要なパートナーです。

日本の歴史、地理的な条件から、自然災害の管理、準備、リスク削減ということに関して第一級の知識を備えています。世界のリーダーとして、活躍していただきたいと思っています。人間の安全保障という概念を日本が提唱し、人道支援の重要なアジェンダの一部となっています。人を中心とする開発に関する包括的なアプローチで、解決をコミュニティベースで図るという方法です。

そもそも、人々が困っている、苦しんでいる人たちを助けるというのは個人的なレベルでは本能ともいえるのではないのでしょうか。それは国際社会においても同じだと思います。こうした「困っている人に救いの手を差し伸べる」というのが人道支援の根幹にあります。政治や宗教、人種などは関係なく、とにかく困っていれば助けるというのが、人道支援の核であるといえます。

OCHA (国連人道問題調整部) の役割は、理念に基づいた効率的な人道支援活動を国内的、国外的なアクターと一緒にやっていくということです。OCHA 発足以前、人道支援を行うアクターはたくさんありましたが、連携が取れていなくて、一貫性がありませんでした。国連機関、赤十字、NGO、それぞれが良いことをやってはいるが、ばらばらで合理的な調整が行われていないということがありました。

もう一つの役割はアドボカシーです。人道的な理念、すなわち、中立的に、独立的に、偏見を排除して支援するという、そして国際社会が問題を理解し、正しく対応していくということを目指して OCHA は提言をしています。

世界で苦しむ人々への対応という点では、ある程度の業績はあると思いますが、まだまだ学習し発展しなければなりません。OCHA は、2004年12月のインド洋の津波やダルフールの問題、そういった経験を通じて、より合理的な、効率的な行動ができるように改革を行ってきました。

例えば、人道支援の資金調達に関する改革です。中央緊急対応基金 (CERF) を作り

ました。突然危機が起こったときになるべく簡素な手続きで、素早く資金を出せるようにしたということです。

また、クラスターアプローチという概念が採用されました。これは、人道支援に関わる様々な組織が責任を持つ担当分野（例えば水、衛生、住居、教育、避難民キャンプの管理など）を決め、分野ごとに責任を持ち、適切な支援が適時に適切な人々に届くようにその責任者が配慮するということです。

OCHA の活動をより具体的な事例を挙げながら申し上げます。一つは自然災害。もう一つは人災つまり紛争などへの対応です。過去においては国家間の戦争が多く、現在では国内の紛争が中心ですが、人々が受ける被害の内容は同じようなものです。

アジアは自然災害が多い地域です。最近の自然災害の被害者の90%はアジアに住んでおります。被災者の数はこれから増えるでしょうし、気候変動もあるので、災害の規模も大きくなります。インド洋の津波は、25万人もの人が亡くなり、何百万人もの人の生活が破壊されました。

津波への対応では、現地での調整が難しい状況でした。ある地域には、50ものNGOがいるのに、別な地域には誰もいないという事態が発生することもありました。しかし、OCHAとしては完璧とは言えませんが、比較的良い仕事ができたと考えています。

次は人災の話です。これはアフリカに多く発生し、長期にわたるものも少なくありません。内戦や紛争では、難民の数は増えないが、国内避難民が増えるということになります。

アフリカの紛争を二つ紹介したいと思います。一つは、非常に有名な、スーダンのダルフール地方です。私は先日現地へ行ってきました。数字を見ると衝撃的です。600万人のうち200万人が家を追われ、難民キャンプなどで生活しています。また、他の200万人は通常の生活ができず、国際的な援助に依存しています。年間7億5千万ドルほどの資金が必要になっています。

いまのところ、避難民を飢餓から救い、ある程度の尊厳を与えるということはできていますし、なんらかの住居、医療、基本的な教育は提供できていますが、それだけでは解決にはなりません。ダルフールは人道問題ではなく、人道的影響を及ぼす政治問題だと言われています。政治的な解決が必要ということです。

OCHA、人道調整官の仕事は、様々な国際機関やNGOが、非合理的な方法で仕事の分担をしていることがあるので、そういった、ギャップ・重複を避けるために調整をするということです。スーダンの政府・軍、平和維持軍、そういった主体が国際人道支援のために円滑に展開するのはどうしたらいいかということを検討しています。

ソマリアも最近視察に行きました。モガディシュに行ったのですが、到着した途端に爆弾の歓迎を受けました。ソマリアでは15年以上内戦状態が続き、政府が存在していません。そのような中、国内避難民がたくさん出ましたし、洪水になったり旱魃がきたり、ひどいときは、同じ年に洪水と旱魃が来たりしました。4月にモガディシュで内乱が悪化し、40万人が戦乱を逃れて国内避難民になりました。2ヶ月くらい、水や食料や医療がない中、厳しい生活を強いられています。われわれもNGOも支援活動を行っています、この人たちはモガディシュに戻れない状況が続いています。

こういった危険な環境の中でどのように支援していくかは難しい問題です。例えば、各地に検問所があり、銃を持っている人がいるが、政府はほとんど機能していないといった状況のとき、どう取り組むかということです。人道調整官はそういう問題にも対応しなければなりません。モガディシュはあまりに危険すぎるので、ナイロビに本拠を置いています。

以上2つのケースにおいて、人道支援は絆創膏のようなものです。すなわち避難民にはなんとか命を永らえてもらって、その間に政治的な解決策を模索するということです。

もう一つ大切なことは、パートナーシップです。様々なアクターと良い協力関係を築けなければ、支援はうまくいきません。例えば、軍との協力に関して言えば、兵隊と人道支援をする人は違う考えの人も多いので、連携が難しいという点があります。しかし、そういう協力をするのは非常に重要なことです。

ほかにも課題はあります。例えば、天災の場合でも人災の場合でも、地域の力を育てていくことが重要です。単に外部からの支援に頼って解決を待つのではなく、協力して解決することが大切です。また、将来に向けて資源があるのかということも重要です。危機があると、ある程度の資金提供は可能ですが、問題が長期化したとき、それがいつまで続けられるかということです。また、ニーズと重要性についてどう評価するか、国際比較も必要で、非常に難しいですが、より科学的な比較が必要です。活動の事後評価も大切なことです。

今までにもいろいろな課題があり、様々な取り組みをしてみましたが、私は今の自分の役割を非常に価値のあるものだと思っています。国連のための仕事は大変だし批判もされますが、誇りをもって仕事しています。

今後日本がパートナーとして、私が申し上げたすべての領域で、専門的な知識を活かして欲しいと思っています。日本のODAの減少傾向が増えるように転じてくれればいいと思いますし、アジア初の事務総長に、日本からも応援していただきたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

\* 同時通訳テープを元に東京財団事務局が編集しました。